2007・1・25

おーい図書館

No 115
発行 おーい図書館
代表 青木和子
松戸市牧の原1-104-416
TEL 047-311-0886

流山図書館協議会を傍聴して

報告 大久保ヒロ子

2006年11月6日(月)、流山市立図書館において図書館協議会が開かれ、公報で傍聴可能と知り、出かけました。傍聴者は一人でした。

協議会の委員は10名で、学校関係者・社会教育関係団体・学識経験者などです。(4名は公募の委員)

平成19年度の市立図書館運営方針(案)・事業方針(案)・予算(案)などについて、生涯学習副部長から詳しい説明がありました。

協議会の中で出された質問・意見及び回答の中から、主なものは以下の通りです。

※

◎市立図書館と学校図書館の連携について

・学校に司書はいないが、小学校においては市立図書館との連携は機能している。中学校では学校差がある。

・コンピューターで市立図書館と連携できればよいと思うが、予算がかかるので、まだ難しい。

・学校図書アドバイザーなど、職員ではなくても能力のある方の力を借りることを考えてもよいのではないか。

◎図書館のビジネス支援について

・地域の要望あるいは問題解決に向けて努力していこうという認識は持っており、事業展開を考えている。

◎図書館協議会の開催について

・意義のある会議にするためには、年2回ではなく3~4回にしてほしい。

・回数については、3回の所・4回の所などがあり　協議会が無い所もある。(注 松戸は無い)

◎指定管理者制度について

・図書館については平成21年に導入することが、現時点では確認できている。管理規定を設けなければならないので、平成20年9月までに作成し、議会の承認を得たい。

・図書館は、その目的から考えると公営が望ましい。民間でできるだろうか。

・図書館は一館で成立するものではなく、他の図書館(他市

県立・学校など）との連携が必要である。指定を受けた業者に図書館業務のノウハウが継続的に受継がれるかどうか、疑問である。

・社会教育法第28条と相反する。全国的に図書館の指定管理者が問題になっているが、実際に経費が安くなっているのか。

◎会議のあり方について

・指定管理者に関して充分な論議がなされたとは思えない。充分な論議がなされないうちに決定されるのは不本意である。この件に関して、メリット・デメリットを市が明らかにして、それに基づいて委員全員が考え方、意見を表明し、それをまとめてほしい。

・可能な限り行なう。

※松戸市には「図書館協議会」は設置されていません。どのような話し合いがされる場なのかを実際に見聞したいと思っていたので、貴重な経験ができたことを嬉しく思います。

上橋菜穂子さん講演会

吉原里絵

2006年11月25日(土)、小平市立中央図書館視聴覚室で、小平市子ども文庫連絡協議会の主催で開かれました。

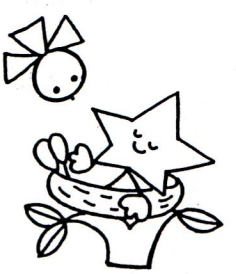
私が上橋さんの講演をぜひ聞きたいと思ったのは、10代に人気の高いファンタジーを書いているということ以上に、文化人類学でアボリジニを研究していて「ちくまプリマーブックス」から『隣りのアボリジニ』を出していたことからです。ここで描かれる人は、伝統的な生活から切りはなされ、民族の歴史的問題と私達と共通の現代人の問題を併せ持つ、今を生きる生身の人間として現われされていました。人間社会を実証する学問の研究者と架空の世界を描き楽しませるという作家というのは、私にはミスマッチで興味深く思えました。

上橋さんは、古代であったら語り部であったろうと思える巧みな話し手でした。幼少からの幸福な本との出会いのエピソードの数々が披露されましたが、私の興味への応えと思えた話しを一つ。

高校時代、学校でイギリスへの短期留学の募集がありました。〝イギリス〟ということで、イギリスの荘園屋敷を舞台にした児童文学『グリーンノウ』シリーズの作者

ボストン夫人に手紙を書き、モデルとなった夫人の屋敷を訪問したいとお願いしました。幸い留学も屋敷訪問も許可が出ました。夫人を訪ね屋敷を案内されて、物語に出てくるものを一つ一つ見ました。そこにはモデルになったものがある、というだけではなく、この場所から『グリーンノウ』の世界が生まれたのだと感じ「作家は、私たちの生活がどうやって作られているのか、手ざわりを経験で知っているから、生活のリアリティーを持っているからファンタジーの世界を描けるのだ」と実感したのです。

現実も架空の世界も「生命」があるから存在しているのだと、私は受けとめました。「生命」を表現するということでは、文化人類学もファンタジーも共通するのでしょう。そして私たちは、いつでも「生命」が表現されているものを求めている、と思いました。



藤代図書館の見学

西山怜子

一、平成18年11月28日、私達「おいい図書館」の4名のメンバーは、取手市立藤代図書館を見学した。図書館前の道で私達を迎えて下さったのが、館長の宮下邦雄氏でした。

二、図書館に入ると温かく和らかい空気です。藤代図書館について、私は何んの予備知識もなく見学したのですが、やはり立派でした。

平成3年に「町立図書館建設を求める請願」が議会に提出されその2年後の平成5年11月、公募された町民を含む図書館建設委員会が発足した。平成12年には司書経験のある館長が全国公募で選ばれ、建設準備室長として参加しました。町内の一級建築士も建築アドバイザーとして参加し、平成15年に出来あがった図書館です。図書館長の公募という発想は成功したのではないでしょうか。図書館に強い理念を持ち実行力ある人が選ばれたと思います。

三、町民（現在は取手市と合併）の老若男女を問わず図書館が利用でき、交流の場にしたいという考えが随所に見られます。

館内は広々と明るい。勿論バリアフリーですが、私の認識より更に進んでいます。例えばトイレもオストメイト用流し台つき、大型のベッドのついたファミリーメートトイレの併設もその例です。空

調も夜間の電気を利用し、環境保護・経費節減を図っている。一階のレストランは障害者の方の働く場になっていて、利用者にも喜ばれています。二階は児童開架フロアですが、親子がおはなし室で絵本を広げている光景を見た時、子どもの将来は明るいと確信しました。とにかく「百聞は一見に如かず」です。

四.町民の叡智の結晶である藤代図書館ですが、「図書館は箱物でなく、人である」という言葉を実感しました。図書館の意義を明確にとらえ、運営していくには、専門家としての司書の働きが重要です。この図書館に入った人は、この図書館が理解でき、好きになるはずです。

館長さんは「要求があれば、外国の図書館からでも本を取り寄せられる」と話され、プロだな、と感激しました。また、この図書館はボランティアの活動が大きな力になっているのが特徴です。設立に際しての町民の関与が、その後にも影響しているのでしょう。

五.松戸市にも良い図書館をと望んでいますが、藤代図書館の建設・運営は非常に参考になると思います。

11月の市議選で、新議員も多く選出されました。図書館が大切なものだと認識する議員であってほしいと思います。

「としょかん文庫・友の会」が発足

「図書館計画施設研究所（菅原峻さん主宰）」発行の機関紙「としょかん」は、各地で図書館づくり運動に係わっている様々なグループの活動をお互いに伝え合い、1981年以来休まず刊行されました。が、2005年1月の100号で終刊となりました。

しかしその後、終刊を惜しみ再刊を望む声が菅原さんのもとに寄せられ、会報なども引き続き送られて来ていました。このような中で昨年の夏、菅原さんの呼びかけに応えて東京近効の有志が「今後どのようにしたらよいのか」を話し合いました。

その結果、菅原さん収蔵の膨大な資料を「としょかん文庫」として日本図書館協会に寄託し、「としょかん文庫・友の会」を発足させることになりました。そして会報の整理など文庫の維持のための作業を行ない、機関紙「としょかん」を再刊する運びとなりました。

（報告　青木和子）